国立国語研究所学術情報リポジトリ

# On Colloquial Style in Newspapers of the Early Meizi Period



| メタデータ | 言語: jpn |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2019-02-15 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 進藤, 咲子, SINDÔ, Sakiko |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15084/00001703 |

# 明治初期の小新聞にあらわれた談話体の文章

進　藤　咲　子

## 1　はじめに

### 1.1　明治初期に行なわれた談話体の文章

いわゆる普通文や言文一致文が出現する以前，明治の初期には新らしい文体を模索しながらも(注1)，現実には，江戸時代から受けつがれた，いくつかの文体が行なわれていた。もちろん書きことばといえば文語文であり，当時この王座を占めたものは，漢文書き下し体の文章であった。一方，戯作系統の文体も江戸文学の伝統を背景にして盛んに行なわれていた。また，布告や書簡文などには候文体が用いられた。

このように，書きことばは，当時の話しことばとはかけはなれていて，言文一致とはおよそ縁遠い存在のものであった。その中にあって微々たる勢力ではあったろうが，話しことばに基づいた文体が行なわれていた。この文体で書かれたものは，池上禎造氏が指摘されたように(注2)，やや特殊な，或は啓蒙的な意味のものに多い。たとえば，開化ものと呼ばれる一群の書物から，一例をあげると，明治6～7年にかけて刊行された加藤祐一の「文明開化」(注3)は，つぎのような書き出しであり，江戸時代の心学道話にみられる(注4)ような形式をとっている。

> 御社中方，定日怠りなく御出で，感心な事で厶る，今月は，別して御連中も多いに依つて，文明開化といふ事を説きましよう

筆者の調査した小新聞もまた，話しことばに基づいた文章でつづられているものが多い。たとえば，読売新聞の発刊第1号（明7.11.2）の禀告の欄に，次ぎの社告がでている。

> 此新ぶん紙は女童のおしへにとて為になる事柄を誰にでも分るやうに書てだす旨趣でございますから耳近い有益ことは文を談話のやうに認て御名まへ所がきをしるし投

書を偏に願ひます（・は変体がな。以下同様）

記事もだいたい，こういった調子で書かれている。女こどもに読ませるのだから，文を談話のようにしたためてほしい（明治10年11月17日の新聞からは，談話が俗話に変っている。）と，わざわざ断ったところに，談話のような文章の特殊性が，うかがわれるわけである。また，つぎのような例も散見する。

有栖川征討総督よりお達しの文を皆さんへわかり易い様に話しに直してお目にかけます（読売　明10.3.10）

これらの文章は，ひろい意味では口語文といえようが，言文一致運動以後にしだいにつくられた今日の口語文(注5)と区別するために，仮に，談話体とよんでおく。

今あげた開化物や小新聞の流れとは別に，洋学をおさめた先覚者たちの間には，国語の甚だしい言文不一致に気づいて，その不自由さを克服するために，言と文とを一致させようとする考えが台頭してきた。なかには，それを実践にうつした学者もあった。たとえば，加藤弘之の真政大意（明３刊），西周の百一新論（明７刊），清水卯三郎の，ものわりのはしご（明７刊）などが，それである。用語は，多分に生硬さを免れがたいが，ござる形式や，である形式の文体を用いている。この先覚者たちの運動は，国家の富強や教育の普及など，もっぱら実用的必要からのものであった(注6)。文学面では，西洋文学の影響や，それに，口語文の基盤である東京語の形成などがあいまって，明治20年に言文一致の文体をみるわけである。

1. 岩淵悦太郎氏はかって，「この時代は文体模索時代ともいえよう」と話されたことがある。
2. 池上禎造氏「明治初期の文章」言語生活（昭27.3）
3. 明治文化全集　第20巻所収
4. 真下三郎氏「道話の言語学的性格」心学１巻（昭16）所収
5. 国語学辞典「口語文」
6. 山本正秀氏「国語史よりみた現代日本文学の成立」国語と国文学（昭25.4）

### 1.2　小新聞について

明治の初期は，新聞が発足したばかりの時代である。当時，新聞に二つの系統があった。一つを大新聞という。今一つは，さきに述べた小新聞である。大

新聞は漢文書き下し体で書かれた論説を主としたもので，当時のインテリを読者対象としていた。権威があり，本格的新聞と目されていた。小新聞は主として巷間のニューズなどを平易な文章でつづったもので，庶民（とくに婦女子）を読者対象としていた。

庶民の教育は，学制がしかれるまで（明治５年）寺子屋で行なわれ３～４歳ごろ入門し，一般に教育期間は２～３年(注1)（女子はさらに短い）のものであったから，おそらくふりがなをたどって読むような貧しい読書能力しかもっていなかったろうと推察される。

このような人々を対象に，肩のこらない娯楽よみものとして新聞を発行したこと，記者たちが大衆の好みをよく知っていたこと，読者の側からいえば，記者の中に，江戸からのなじみの戯作者が多くいたことなどが，やさしい文章と相まって，小新聞は庶民に歓迎されたようである。

明治初期の代表的小新聞は，読売新聞，東京絵入新聞，仮名読新聞（明10.3.16かなよみと改題）の三紙である。(注2)（以下略して，読売，東京絵入，仮名読とする。）これらは明治７～８年に相ついで発刊されている。それ以前，橋本貫一の開知新報（明2.4）や東京仮名書新聞（明6.1）前島密の「まいにちひらがなしんぶん」（明6.2）が啓蒙的意図をもって発行されたが，内容が堅苦しかったり，かなばかりで，かえって読みにくかったりの難点があり，一般に歓迎されず短時日のうちに廃刊になった。

筆者は，この調査の資料に，上に述べた読売，東京絵入，仮名売の三紙を用いたので，以下，この三紙について調査した事項(注3)を記しておこう。

○三小新聞（読売，東京絵入，仮名読）の編集者と記者（明治10年での調査である。）

読売の編集長は英学者鈴木田正雄である。彼は，他新聞の記事などから推して名声の高い編集長だったらしい。柴田昌吉，子安峻の「英和字彙」を手伝った人である。おそらく，言文一致の問題についても関心をもっていたろうと考えられる。高畠藍泉や饗庭篁村が記者として活躍していた。東京絵入は，編集長が国学者前田夏繁（新聞小説の始祖といわれる「金之助話」を書いた。）で，記者に二世春水染崎延房がいた。仮名読は，仮名垣魯文とその弟子たちが拠った新聞である。

○体裁（明治10年現在での調査）

縦33センチ，横22センチほどの小型４ページ建ての新聞である。各紙面３段からなり，１段28～30行詰，１行24字詰である。紙面構成は，官令（おふれ）（公聞），雑報（はなし）（新聞），投（しんぶん）（なげ）

書（寄書），相場，広告の欄に分れている。東京絵入は，２～３面に挿絵がある。

○発行部数

明治11年の図書局年報記載の年間発行部数（明10.7～11.6）から推定すると，読売２万２千，東京絵入６千，仮名読は５千となる。読売の発行部数は，大新聞の代表的存在であった東京日日新聞よりも発行部数が多かったのである。

○読まれた地域

各紙とも４面の下段に売捌所を掲載してある。それによると，東京を中心として関東一円，それに大坂，神戸，名古屋，静岡などで主として読まれたようである。

当時，読売は真面目にして親切，東京絵入は華麗にして愛嬌あり，かなよみは洒落にして軽妙，といわれた(注4)。読売，東京絵入，かなよみと次第に品格が下り，かなよみは，花柳記事の元祖となった(注5)。このように三紙ともそれぞれ特色をもっていたわけである。

1. 「近世の国語教育」文部省刊行　国語シリーズ17
2. 小野秀雄氏「日本新聞発達史」（大正13.3）
3. 主として用いた参考文献
   (1) 小野秀雄氏「日本新聞発達史」（大正13.3）
   (2) 伊藤正徳氏「新聞五十年史」（昭18.4）
   (3) 伊藤整氏「日本文壇史」１巻（昭29.10）
   (4) 西田長寿氏「新聞雑誌の発達」国語と国文学（昭30.10）
4. 小野秀雄氏「日本新聞発達史」106ｐに野崎左文翁の言として引用されている。
5. 小野秀雄氏「日本新聞発達史」

筆者は，上述した，読売，東京絵入，仮名読三小新聞の談話体で書かれた文章について，(1)話しことば的特徴，(2)記事文としての傾向，(3)表記，の三つの面から考察することにした。紙面の都合上，(2)と(3)は，一つ二つの特徴をあげるにとどめた。

主として使用した資料と年代は，明治10年２～３月の読売，東京絵入，仮名読の三紙と，明治10年２月24日の東京日日新聞である。読売，東京日日は，東大明治文庫蔵のものを，東京絵入と仮名読は，国立国語研究所蔵のものを用いた。小新聞の談話体の文章は，読売についてみると，発刊当初（明治７年11月）から，明治13～14年ごろまで，だいたい同じ割合で用いられている。筆者が明治10年をえらんだのは，国立国語研究所蔵のものが，この年のこの月のものだったからで，他に特別な理由はない。

## 2　話しことば的特徴について

### 2.1　文末表現について

談話体の文章の特徴が，とくに文末表現に強くあらわれていることはいうまでもない。

あらかじめ断っておくが，小新聞の文章は，そのすべてが，談話体で書かれているわけではない。官令欄には，布告をそのまま写して，候文体や漢文書き下し体のものが多い。記者の筆になる雑報や，読者からの投書には，「なり，けり」式の文語体のものも少なくない。こころみに無作為抽出法によってえらんだ7日分について，雑報投書をコミにして，談話体，文語体の割合を行数で調査した結果，談話体の文章は，読売に85%，東京絵入に67%，仮名読に63%含まれていることが分った。

なお，無作為にえらんだ7日分は，つぎのものである。（東京絵入と仮名読は，欠号があるので，日順に一連番号をうって操作した。）

**号数と月日**

| 号・月日 ＼ 新聞名 | 1 | | 2 | | 3 | | 4 | | 5 | | 6 | | 7 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 号 | 月日 | 号 | 月日 | 号 | 月日 | 号 | 月日 | 号 | 月日 | 号 | 月日 | 号 | 月日 |
| 読　売 | 633 | 3.3 | 636 | 3.7 | 639 | 3.10 | 642 | 3.14 | 645 | 3.17 | 648 | 3.21 | 651 | 3.24 |
| 東京絵入 | 493 | 2.13 | 497 | 2.17 | 500 | 2.21 | 502 | 2.23 | 505 | 2.27 | 507 | 3.1 | 510 | 3.4 |
| 仮名読 | 282 | 2.8 | 296 | 2.24 | 307 | 3.12 | 310 | 3.15 | 316 | 3.21 | 319 | 3.24 | 322 | 3.27 |

では，その文末表現は，具体的にどういうことばが用いられていただろうか。上記の7日分について調査を行なった結果を記述する。

読売は，調査文数294文のうち，ます体154文(52%)，だ体105文(36%)，であります体26文(9%)，ございます体9文（3%）の4種類であり，丁寧表現が多く用いられていた。(64%)

東京絵入は，調査文数177文のうち，ます体79文(45%)，だ体70文(40%)，であります体17文(9%)，です体7文(4%)，ございます体3文(1.5%)，ございます体1文（0.5%）の6種類であり，読売と同じく丁寧表現が多く用いられていた。(60%)

仮名読は調査文数371文のうち，だ体243文(65%)，ます体87文(24%)，であります体25文(7%)，です体7文(2%)，である体5文(1%)，ゲス体2文

(0.5%)，ござる体2文(0.5%)の7種類であり，常体表現が，読売や東京絵入より多かった。(ここでは，三小新聞の比較が目的でないから多くはふれない。)

だ体にはつぎのものを含めた。(なお，文末が，「～といふ」の形などで終るものは談話体に含められるか，うたがわしいが，文中表現に談話体形式が用いられているものは，ここに含めた。)

だ止め

今に明教新誌が仏臭叱咤をいふだろう(かなよみ　明10.3.21)

名詞止め(形容動詞語幹を含む)

此頃の不印にも此廓計りは桃源の別世界(仮名読　明10.2.8)

用言止め

自分独りの糊口が出来ないとはまア情ない(東京絵入　明10.2.27)

感動詞止め

大坂日報へも「新政大都督出張局」といふ名で梟首にするといふ手紙が届いたといふが何とマア(読売　明10.3.17)

なお，文中にあらわれた(1)常体，丁寧体の用法をみると，三小新聞とも常体表現が圧倒的に多く80%以上を占めていた。また(2)文語体の表現についてみると4%(読売)～10%(東京絵入，仮名読)あらわれていた。

(1)の例

永代橋からドンブリ遣らふと為たのを折よく巡査に止られたさうだが実に是では困りませう(東京絵入　明10.2.27)

(2)の例

失火に至らんとするを消留たる所壱ケ所捕縛する窃盗壱人で有り升た(かなよみ　明10.3.21)

文末が，だ体のもので，文中表現に丁寧体を用いたものが，まま見られた。

焼場で釘を拾ひながら噺して居ましたがナンのことだか(東京絵入　明10.2.27)

今みてきたように，文末表現は不統一である。また，用例は省略するが一つの記事の中でも，文末表現が統一されていないものが多い。

次に東京語の形成，ならびに口語文の成立を考察するにあたって，重要な地位を占める，「です」「であります」「である」について，小新聞での用法を記述しておこう。

○です

東京語の形成については，待遇表現の変化による，です，ますの使用の一般化があげられる。(注1) 明治初年の，ます，ですの使用率の多少，用法の広狭については，すでに中村通夫氏の指摘されたところである。(注2) （ますが使用率が多く，用法も広かった。）小新聞における使用率も，すでに述べたように，これと同じ結果があらわれている。

小新聞の「です」は，つぎのように用いられている。

人の大事は唯心の置所ろが肝要です（仮名読　明10. 2. 24寄書）

そんなら我の首を刎ろと言はれたそうです（仮名読　明10. 2. 24）

感服の余り知らせると言ふ或人からの投書でした（東京絵入　明10. 2. 27）

江戸ことばの「です」は，明治の近くまで，終止形一形しか使用されていないが小新聞には，終止形以外の活用形があらわれている。（湯沢幸吉郎氏は，「江戸言葉の研究」に，幕末の用法として，でしよ，でしの形をあげておられる。使用者は芸妓，遊女である。）しかし，小新聞の「です」は，ある限られた階級の会話としてでなく，上にあげたような文章の用語として登場しているところに，丁寧体としての現代的用法がみられる。とくに2番目にあげた例は，論説的な文章の用法である。なお仮名読（明10. 3. 24）に，です体の投書がある。

譬へば北海道の果に未だ一軒も家の無い曠野などへ家を建て追々に隣〳〵と家が殖升道理です又是に同じやうな事ですが〜

投書者の名か，文中に引用した短歌の作者名かはっきりしないが，風也坊とある。当時のですことばのニュアンスを知る上にも階層や年齢などを知りたいところである。

○であります

であります体は，口頭語としては，明治の初期に，演説のほか，洋学書生や開化先生に特徴的に用いられた例がみえる。(注3) 小新聞では，

捨る鬼があればこんな仏心の人があるとは世はさま〳〵な物であります（東京絵入　明10. 2. 13）

順天堂と大方肩を並べるで有升う（仮名読　明10. 3. 15）

のように書きことばとして用いられている。2. 2の調査に用いた東京日日の社説の漢文書き下し体の，たとえば「学バント欲スル乎」という言いまわしを，

仮名読で「真似る気で有ますか」と，であります言葉に言いかえている。これには，でありますが特徴的に用いられているのだが，この内容は，多分に論説的なものである。こんなところから，当時の「であります」言葉の口頭語におけるニュアンスがうかがえる。

○である（「である」を談話体に含めるのは，現代の用法からみると，問題があろうかと思われる。しかし，当時，会話書に用いられており，また，一部の人の口頭語として用いられた報告があるので，ここに含めた。）

左も無いと生ながら火葬に逢ふ処ろで有た（仮名読　明10．2．8）

文中には，たとえば，

人臣の大節を心得るからの事で有のに（仮名読　明10．2．24）

のように用いられている。

「である」は幕末からオランダ語の Zijn や英語 is の訳語として用いられた。安政7年ごろからの会話書（「商用通語（安政7）」「英語箋（万延元）」）などに用いられ，このことから西洋好みの一部時人に迎えられ，その口頭語に載ることとなったようである。(注4) 読売の明治7年11月22日の公聞欄の鐵道寮御規則は，である体で書かれている。

一，小荷物は損じても荷主の請持ゆゑ只鐵道寮にてはステーションよりステーションまでの間を送るばかりで有る

右賃銭はたゞ蒸気車でおくるだけの事にて持込配達の代は別だ

一，前 条賃銭 並に手続等は各ステーションでも同である

おそらく，この原文となった官令は，漢文書き下し体か，候文体を用いたのではないかと想像される。大新聞の東京日日に，同じものが原文で掲載されていないかと，その前後の日付まで見たが見当らなかった。

「である」はその後明治20年代に文学面に用いられ，30年代に一般文章に用いられるようになって，今日の文章語としての隆盛をみることになるわけである。(注5)

なお，その他文末表現の一二の特徴をあげておこう。

終助詞

小新聞には，「か，よ，さ，な，ねえ，ぞ，ね」などの終助詞が，しばしば

用いられている。

大痴漢ではありませんか（東京絵入　明10. 2.13）

猶畏れて服ふ了簡で有ますか（仮名読　明10. 2.24）

急場の用に実に困る事がございますよ（東京絵入　明10. 2.23）

雲を摑む口軽連の困り者が集るのは厄介サネ（かなよみ　明10. 3.21）

言いさしの形，補充的な用法

外のお客の障りになるので是も其筋へ訴へられたといふがどれも〳〵能年をして（東京絵入　明10. 3. 1）

五人体からお言葉がチト頓珍間ゆへ取あげが無つたそうだが大壮な男で有ます口は（かなよみ　明10. 3.24）

話しことばは，書きことばに比較すると，終助詞や，言いさしの形，補充的な用法のあらわれることが，特徴としてあげられる。(注6)小新聞も上にあげたように，話しことばの特徴的用法が取り入れられているのである。

1. 松村明氏「東京語の成立と発展」江戸語東京語所収（昭32. 4）
2. 中村通夫氏「ですの語史について」東京語の性格所収（昭23.11）
3. 中村通夫氏「であります言葉」東京語の性格所収（昭23.11）
4. 5. 山本正秀氏「デアルの沿革」橋本博士国語学論集所収（昭19.10）
なお，この文献に島村抱月等がデアルを浜言葉と呼んでいたと記されている。
6. 中村通夫氏「談話のことばと放送のことば」言語生活（昭26.11）

## 2.2 用　語

小新聞の談話体の用語(少し広い意味をもたせ，言いまわしの一部を含めた。)について，たまたま大新聞の社説(漢文書き下し体の文章)を，小新聞で談話体に書きなおしたものがあったので，それを比較考察してみることにした。調査に用いたのは，大新聞の東京日日新聞の社説(明10. 2.23)と，小新聞の仮名読新聞の東京日日新聞千五百六十四号社説和解（明10. 2.24）である。(以下は，筆者が文の長さ，用語，言いまわしなどの比較によって，調査を進めているものの一部を転用したものである。)

社説和解は，社説の用語を，談話体の文章の中に，こなすために，大別次の方法を用いている。

1. 言いかえ，2. 削除，3. 挿入，

1.　言いかえ

これには，二つの方法がある。

(1)　本文は社説と同じ漢字語（ここでは漢字で表記された語）を用い，ふりがなによって言いかえを行なう。

(2)　本文の漢字語そのものを変える

(1)の例

兵器，大技倆，大政府，朝廷，(お)術，探訪，大英才，奇策妙計，時機，豎子，瞞着せやう（社説瞞着セン）

(2)の例（社説左，社説和解右）

否～イヤ，いやいや。維新～御一新。況ンヤ～況て。活然～のんこのしやア。嘗テ～前方。軽シク～軽浮に。是レ豈～是ハソレ。九原ノ人～冥土の人。蓋シ～考るに。闕下ニ縛致センノミ～珠数繋ぎふん縛る計り。冉有子貢ノ徒～十哲の兄貴達。腐儒～屁っぴり儒者。浮説～湯屋散髪所のはなし。孟軻～孟子。故ニ～だから。所以ノ者～所以，所以柄。

これらは，つぎのように分けてみることもできる。

a．日常語を用いた類

兵器　朝廷　御一新　況て(社説況ヤ)　だから(故ニ)　など

b．卑語を用いた類

のんこのしやア　ふん縛る　屁つぴり儒者　など

c．人名など固有名詞について，世間に通っているものを用いた類

十哲の兄貴達（冉有子貢ノ徒）孟子（孟軻）会津征伐の役（東征ノ役）など

漢文書き下し体には，特有の副詞や接続詞が用いられるが，それが，ほとんど話しことばに直されているのは，当然のことであろう。

（和語と漢語の割合をみると，社説和解は，和語 411，漢語〈一字でも音よみがあれば，漢語とみなした〉84であった。社説，和語301，漢語203であった。何れも自立語のみの調査である。社説和解の漢語は，道理，大方，叛党，平常，威張るなど，きわめて日常語化したものである。社説の和語は，則チ，恐ラク，曰ク，見做ス，携フなど硬い表現のものが多かった。なお，社説和解は，仮名垣魯文，社説は福地源一郎の筆になるものと推定される。）

2.　削除（社説左，社説和解右）

挙動ニ於テ～挙動ニ

何ニ因テ而シテ起ランヤ～何で起りますか

此レガ前トナリ～先陣となり
見ル所ヲ以テスレバ～見る所では

傍線の語は漢文脈に，しばしば用いられる語である。これらは実質的な意味を持たずに，文の調子を整えるのに用いられる場合が多い。削除しても意味の上には変化がなさそうに思える。

3. 挿入

社説和解に，新たに挿入された語句には，

(1)俗語卑語の挿入

威張つた，恐れながら，大兄貴，南方，彼奴等，接続詞の而で　など

(2)一般庶民に耳なれない語に説明を加えるための挿入。たとえば，社説のシーザルハカピトルニ死セズを，羅馬の「四位猿」といふ赤蠶は家来の「官費取」に殺されず　のように。

(3)会話文の挿入

其時にやア背に腹は換られねへ。ナンノ構ふ者か　など

社説和解の終に，嗚呼滅方長かつた兄弟士人薩五体屈とある。もちろん社説にはない。これにいたっては，戯作者根性まるだしである。

## 3　記事の傾向

記事の傾向として，とくに目立った二つのスタイルがある。一口にいえば，一方の傾向は報道的であり，他方は戯作的である。

報道的傾向をもった例，

南の関より廿一日の夜る電報に～賊は山鹿を捨て走り～官軍が進んで～一手に～賊を追ひ一手は隈府へ～追つたとあり～我兵は～賊のために～烈しく突れ～引揚げたが兵が不足ゆえ～取計ひを頼むとあり～（読売　明10. 3. 24）

～兵隊は～繰返みに成ッたといひ安藤中警視が～出張されるといふ風聞があり～昨日東京へ着した所まで出した大山綱良は～監倉へ入れられました（読売　明10. 3. 24）

上の例は，電報で報せてきたものを「～とあり」の形で続けていく方法であ

る。下の例は，～といひ，～といふ風聞があり，のように「～といひ」で，文をつづけていく方法である。もちろん，上，下両形まじり合ったものもある。「～と」が受ける文相互には何の関聯性もない。紙面と時間の制約が，こういう型を作ったのだろう。この型は．現代新聞の，「文章としてはダラダラつづくが，読過の印象としては単文の連続の感を与える並列の文章」と似ている。(注1) こういう客観的報道の型は，とくに読売の戦争記事にみられた。この種のものには，つぎのように，取材に忠実なものもみえるのである。

是から先は昨日のきゝこみと外の新聞から抜たのとが有ります(読売　明10．3．2)

長い文では，185文節のものもあった。(明10．3．7のもの)

社会記事（情話，喧嘩，美談など）は，小説と事実の中間をいくような書き方である。当時は，時，場所，人物などをぼかす戯作的習俗があった。(注2) その戯作的傾向のものから例を引こう。

築地柳原町の中野太一郎の宅の同居人北川儀八郎の姪おみき（三十八）は先頃迄は～別宅をして居たが病気が出たので～儀八郎の所へ引取られたけれど～病気も重り～家を出た切り帰らないから～心配して居ると～女の死骸があると聞き～引揚て見ると～おみきであつたと言ふ事だが可憐さうに～ドンブリ遣つた物と見えます（東京絵入　明10．2．13）

おみきの行動は帰らないまでである。引揚て見たのは叔父のようである。可憐そうにからは，記者の言である。66文節の文であるが，「が，ので，けれど，と，や」や中止法が用いられ，長たらしく曲折して，しまりがない。この種の社会記事には，203文節のものもあった。(東京絵入　明10．2．13)とくに，東京絵入には，こういった傾向が多くみられた。記者の教訓的意見が加わって「早く二人とも心を改めればいいが」「婦女子も御用心なさいまし」と書きそえたものも，この種の記事に多い。

1. 波多野完治氏「新聞文章の心理学」現代文章心理学第三編　(昭25．12)
2. 読売新聞から見た日本文化の80年（昭30．3）

## 4　表　記

すでに与えられた紙面もつきたので，簡単にルビについてだけ触れておこう。

小新聞の文章は，漢字平がなまじり文であり，右側に総ルビが施されている。本文の漢字は5号活字であり，ルビは7号活字である。

本港羽衣町の辨天は此ほどから修覆にかかり境内の両側へ桜を数本植付ました（仮名読　明10. 2.24）

このように，本文の漢字語（漢字を用いて表記された語をさす。）の音や訓を（いわゆる宛字や熟字訓を含む）あらわす一類がある。（これは，当時の漢字語のよみ方を推定する好資料となるものである。）

愚気た一件（東京絵入　明10. 2.13）　人力車を曳て活計す（東京絵入　明10. 2.27）
今夜はモウ廃止て帰らう（仮名読　明10. 2.13）大痴漢ではありませんか（東京絵入　明10. 2.13）巡査に止られたさうだ（東京絵入　明10. 2.27）

このように本文の漢字語からいえば，ルビがその意味をあらわしている一類である。読み下す立場からいえば，ルビ側が，よみの本体である。もっとも，上記のうちあとの2例は，漢字の側でも読める。しかし文の調子からいうと落着かない。

つぎに，漢字語が本文としての権利を放棄して，文字遊戯的なものになり，書き手の頓智の才をみせるといった式のものがある。次の例は，古今集の序文の冒頭をもじって，西南戦争を茶化したものである。

山師男は人の懐を目的にして万の事件をそ嗅附にけると麁の児禽醜の九州餓鬼にある通りだが～（仮名読　明10. 3.27）

また，つぎのようなものもある。

何処の新聞も皆な戦争の事で看客も耳にヲツト眼に蛸で烏賊にもお五月蠅ございい升ふが（仮名読　明10. 3.24）

とくに仮名読にみられる傾向である。全国新聞雑誌評判記（明治16年刊「明治文化全集」17巻所収）に，魯文について，世の中にない熟字をならべると評しているが，このようなものも含まれるのではないかと思われる。

小新聞のルビは，ほとんどが本文として読み下せるものばかりであった。傍訓目的の仮名読にかな違い（仮名読明10. 3. 7）とあるのをみても，ルビの側で読み下すのがよみの本体だったのであろう。

漢字漢語オンリーの時代であったから，漢字漢語に縁のうすい人々には，ふりがなが必要であった。小新聞が総ふりがなであるのは，こういった配慮があ

ったものと思われる。また，この形式は江戸戯作の伝統でもあった。

## 5　おわりに

小新聞の初期のものにあらわれた，このような談話体の文章は，それから4～5年のうちに，「なり，けり」式の文語文に侵食されていく。談話体のもっとも多くあらわれた読売について調査したところでは，読売雑譚（社説に相当する）や，外国通信（特派員の報道）などから，文語形式がひろがっていくようである。この変化は，談話体の文章自体に問題があるのか（たとえば，記事文として冗長である。敬譲表現がわずらわしい。高級な報道をするためには，むずかしい用語を必要とするので，この文体では，ゆきたけが合わなくなる。）または，一般庶民（とくに婦女子）を対象として発行していたものを，さらに読者層を上層に拡大しようとしたため，より普遍的な文体をえらんだためなのか，あるいは，書き手の側に，何らかの問題が生じたのか（たとえば新聞として大新聞のような権威を持ちたい）このへんの事情は，明らかでない。

明治30年代になって，今度は言文一致運動に刺激されて，三面記事や家庭欄などに，ボツボツ口語文記事があらわれるようになる。言文一致にも何がしかの貢献をしたであろう。(注1) この文体は，その時まで，新聞から，ほとんど姿をみせなくなるのである。

1.　山本正秀氏「国語史よりみた現代日本文学の成立」国語と国文学（昭25. 4）